

かとうさんのアコーディオンは、心に「風」を吹き込んでくる。夏の浜辺にちりばめられた光や、黄昏ときの切ない匂いも連れて。聴いているうち、ふっとどこかへ誘われ、胸の中に染み込んだ音が広がって、いつの間にかドラマのシーンを描いている。

父の勧めから4歳でアコーディオンを始め、数々の国内コンクールに優勝。高校卒業後はフランスへ留学した。2年間、パリでレッスンに通った後、郊外の全寮制の学校へ入学。「牛と羊が人より多い田舎なので、思いきり演奏できる。個性豊かなアコーディオン仲間や先生にも出会って、大きな収穫でした」。クラシック音楽のみだったスタイルが一転、解放されたようにポピュラーや本場のミューゼットを弾き出した。

とはいえ、進路に悩んで演奏に集中できない日も。ロシア人の先生は「悩みごとでもあるの。レッスンをやめよう」と湖に連れて行ってくれた。「気持ちが悪く落ち着いたら、楽器を手にするといい。今日は水の流れを見て鳥の声を聴こう。帰国すればこんな景色を思い出すこともあるさ」。その情景は、いまも演奏中に励ましてくれる。以来、思いを映す旋律が心にあふれるようになり、仲良しの姉の「たまごん」が結婚するときも、曲をプレゼントした。

愛用するのは、ボタン式のクロマチックアコーディオン。「ボタンの数は全部で200。鍵盤式より音域が広いんです。抱えた感じも、丸みがあってしっくりくる」。特注でカラフルな色をあしらったイタリア製の楽器に「ピエロ」と名付け、93キロの重さも感じさせないほど、自在に、いとおしむように弾く。フランスのコンクールでも数々の栄冠を勝ち取ってきた実力の持ち主だが、気負いを感じさせない、おっとりとした語り口。

「実はすごく緊張する性格。コンクールは励みとなるので、先生に勧められれば参加しましたが、人前で弾くのは苦手でした」。ライブを重ねるうち、聴く人が味方になってくれる喜びを味わうように。「いつも、一つひとつの音に心を込めて弾くことを大切にしたい。そして、「アコーディオンでこんなこともできるの?」といわれるほど、可能性を追求したいですね」。(梅沢 英)

コンサートやライブハウスでの演奏のほか、病院や学校でもライブを開催。アコーディオンの講座も開いている。「アコーディオンの仲間が多いのは何より嬉しい。教えることで私自身も勉強になります」。(左写真撮影:Yoshinori Matsuzaki)



**心を込めて弾けば、  
聴く人が味方になってくれる。  
その喜びを  
実感できるようにになりました。**

フランスの田舎の青空や、波が打ち寄せる砂浜が、かとうかなこさんの心に飛び込んできたとき、メロディーが生まれた。そのアコーディオンで描く音は、いつも軽やかに、イメージの世界を駆け巡る。



S T A G E N O W

クロマチック・アコーディオン奏者

**かとうかなこさん**

Kanako Kato

17歳で全日本アコーディオンコンクール総合優勝。高校卒業後すぐにフランスにアコーディオン留学。世界的プレイヤーの指導を受け、在学中には全仏コンクールでも第1位を獲得する。03年1月「Le ciel ~空~」を、04年7月「ひだまり」をリリース。収録曲が多くのテレビ番組で取り上げられ話題となる。今後の予定は、6/24(金)大阪・泉の森ホール、6/28(日)奈良・やわらぎ会館、7/18(土)東京吉祥寺・スターバインズカフェ、9/25(日)愛知・文化フォーラム春日井

<http://www.katokanako.com/>